

パトリック・ブランのGreen Envelope —— 植物学者のつくる垂直の庭の可能性

Green Envelope by Patrick Blanc —— Botanist's Vertical Garden and Beyond

話し手

パトリック・ブラン

Patrick Blanc

1953年パリ生まれ。植物学者であり世界中で多くの垂直の庭をてがける。作品に「Musée du Quai Branly」(ジャン・ヌーヴェルと協働)、「Caxia Forum Museum」(ヘルツォーク&ド・ムーロンと協働)ほか
<http://www.verticalgardenpatrickblanc.com/>

聞き手

福岡孝則 Takanori Fukuoka

神戸大学大学院特命准教授
会誌編集委員

パトリック・ブランはフランス人の植物学者であり「垂直の庭」の作者としてパリからバンコクまで世界中で200以上の垂直の庭を手掛けてきた。熱帯雨林をフィールドに岩肌に生える植物を研究していたブランが複雑な状況に生きる多様な植物に感銘を受け、都市の垂直面に目を向けて金属製のフレームと防水層、耐蝕性と保水力のあるフェルト層を組み合わせた新しい植栽基盤の発明をしたことで都市の自然に新たな局面が開かれた。今まで荷重や光環境など多くの制約条件のためにあきらめられてきた場所に垂直の緑を創造するというインパクトや彼の影響は語るまでもないだろう。本稿は、未来のエンヴェロップ・デザインを考えるうえでブランの緑のエンヴェロップの持つ可能性について、そして常に進化するブランの挑戦についてインタビューを中心にまとめたものである。(福岡)

——ブランさんの経歴を簡単に整理すると、世界中の熱帯雨林の中で垂直面に生える植物を研究されていた研究者時代、実験的に垂直の庭をパリでつくり始めた時代、そして、ジャン・ヌーヴェルやヘルツォーク&ド・ムーロンらと協働して世界中でプロジェクトを展開する現在とに整理できますが、植物学者としての活動や植物研究を続ける意味についてお話しいただけますか？

植物学者としては現在もフィリピンのマニラ大学と共同研究を続けており本も執筆中であつたり、新種の植物を発見したりと活動は継続しています。特に植物学者としての才能を発揮するのは新しいプロジェクトの敷地でその土地の潜在植生を理解し、水の流れや植物のおかれている微細な環境を即座に感じる点ができる点でしょうか。こうした植物学者としての経験が垂直の庭の設計に生きてくるのです。

——ジャン・ヌーヴェルも『The Vertical Garden』の前書きのなかで、「ブランは植物学の知識が非常に深く垂直の庭のシステムも素晴らしいが、結果はいつもミステリアスである」と書いていますね。あなたの設計される垂直の庭では、時間の流れによる変化はどのように考えられているのでしょうか？例えば、何百種類もの植物学者によって選び抜かれた植物のレイアウト図をつくるときに、経年変化やダイナミックな植物間の競争や変化をどのようにとらえながら設計されているのでしょうか？

私がデザインしているのは生きているファサードですからもちろん時間とともに植物の形成する状況も変化します。植物は数百種類以上を混植しますが、垂直面の持つ気温や湿度の分布、風の向き、日照条件などによって位置を決め、時間による変化も想像しながらデザインします。しかしながら、私がデザインする垂直面は過酷な環境であることが多いため、80%以上が生き延びることができるようにというのを目安にしています。つまり、ある程度は予測できる成長や変化であり、予測不可能であったものは受け入れ、臨機応変に対応することになっています。

——建物の内側と外側の垂直の庭では何に気をつけながらデザインされるのでしょうか？

建物内側の垂直の庭をデザインするときは、気候帯によって温度や湿度の変化は異なりますが基本的に閉じているために選択する植物の構成種類も似通ってきます。一方、常に外部環境に晒された垂直の庭をデザインする際は複雑な環境条件を読み解き、風や日照条件や湿度などを考えながら地域特性に合った植物を選択するように心がけています。しかし、プロジェクトの置かれている微細な状況は本当に多様ですから一般的に語るこ



図1 Caixa Forum, Madrid, Spain



図2 Musée du Quai Branly, Paris, France



図3 Pérez Art Museum Miami, Miami, USA

とは難しいです。

——多くの人々が垂直の庭を生物多様性や微気象緩和の観点から語りたがりますが、あなたのデザインする垂直の庭の背後にある哲学についてお聞きます。私の想像ですが、ブランさんが目指しているのは都会の真ん中にあってもそこに人々が驚嘆するような緑のファサードを創出して、植物の持つテクスチャーや色の洪水を持ち込み、湿り気や冷涼感から熱帯雨林のイメージを喚起することなのではないかと思うのですが？あなたのデザインする垂直の庭のメッセージは視覚的なものだけではなく何かそれを越えた感覚を目指しているのではないのでしょうか？

最初に断っておきますが、私がデザインする垂直の庭は非常に人工的な自然です。生物多様性ということは何百種類もの植物を場所に合わせて組み合わせますからもちろん意識します。しかし、より意識しているのは、野生を都市に持ち込んで一瞬でも熱帯雨林を喚起させ、感嘆するような多様な植物の生き様から人間に何か感じ取ってほしいというのが私の狙いです。都市緑化の有効性を説いたり、遠く離れた熱帯雨林の保護活動や希少植物の保全運動よりも有効な手段を模索しているのです。

——あなたの著書『The Vertical Garden』のなかで自宅でも実験的に垂直の庭を模索し続け、外側の垂直の庭と内側の垂直の庭を一体的にひとつの緑のエンヴェロップとしてつくっていると書かれています。Inside-Outsideの新しい関係性を考える際に垂直の庭はどのように機能してくるのでしょうか？

パリの自宅の内側と外側の垂直の庭の関係というのは私の極めて個人的なライフスタイルから来ています。朝シャワーを浴びて室内の垂直の庭の側で早朝の仕事をこなし、冬の寒い時期は少しでも太陽の光を求めて外側の垂直の庭に近いテラスで日光浴をしながらコーヒーを飲んだりするのです。日本建築でも伝統的に内部と外部の関係がありますが、私の場合は連続した植物との関係のある生活に常に身をおきたいということだけで

す。もうひとつ付け加えると、15年以上前にカルティエ財団の現代美術展に出展した「To be Nature」では室内と屋外に垂直の庭を展示し、人々が屋外の垂直の庭に反応を示すのを確認できました。つまり内側と外側の関係は極めて個人的な興味や経験から始めたものですが、今では多くの人々に植物で構成された内と外の関係を示唆できることに喜びを感じています。

——最後の質問になります。今まで200以上の垂直の庭を手掛けられてきましたが、今後の垂直の庭の進化の可能性、そして、これから挑戦したいことがあればお話しいただけますか？

難しい質問ですね。私が目指しているのは植物の持つライフ（生命性）というものを都市に持ち込むこと、そして、垂直の庭が持つ多様な植物のテクスチャーや色彩などの組み合わせはもちろんですが多種多様な植物の間の非常に複雑な関係をできるだけ正確に伝えることによって人間の感覚に訴えかけることです。つまり乾燥した砂漠の中の都市や零下20度の極寒の都市の中に住む人のために、植物の生き様を感じ取ってほしいということです。

ブランは現在までに世界中の室内や屋外の垂直の庭を創出してきたが、さらに進化を続けている。都市内のどんな場所にも垂直の庭を自由な発想で、植物学者の経験に基づいた緻密な植栽設計を行ってきたが、近年はマイアミのPérez Art Museum Miami（ヘルツォーク&ド・ムーロンと協働）のように屋外のランドスケープと建築との間の領域に吊り型の植物の柱を出現させるなど、新たな試みを始めている。インタビューのなかでブランが述べたように、彼は都市の中に驚嘆するような植物の多様で複雑な生態を持ち込み、人々の心を惹きつけることに興味を持っている。常に挑戦する彼の情熱を支えるのは、熱帯雨林の林床を歩きながら常に新しい発見を求め続ける植物学者としての好奇心であり、今後も建築とランドスケープの境界を溶かすような挑戦を続けていくことが期待されている。（福岡）